

第一十六章 幕間狂言

五ヶ月間にわたった挙党協騒動は、一転妥結して大団円を迎えたかに見えたが、それは党内だけのことで、対外的には何も解決されたわけではなかつた。

自民党をめぐる国民の批判はますます厳しく、その中で、近々一、三ヶ月以内には議員任期満了となり、いずれにせよ総選挙による国民の審判を受けなければならないのである。しかも、党内抗争で時間を空費してしまつたため、総選挙のための態勢づくりの余裕はほとんど残されていなかつた。

臨時国会を前にした九月十五日、三木首相は党、内閣の改造を行つた。それまでの人事体制は三木内閣発足以来のものだつたが、この間、一年九ヶ月を経過しており、改造なしの内閣としては戦後最長のものとなつていて、重なる事件と三木首相の党内基盤の弱さのため、改造したくてもできなかつたのである。

首相周辺では、『ことじそ自前の内閣ができる』と人事に意欲を燃やした。挙党協側は、選挙後には総理・総裁を含めて体制の全面刷新は必至と見て、内閣人事にはそれほどこだわらなかつたが、党三役、とくに幹事長に対してだけは重大な関心があつた。来るべき総選挙に当つて采配をふるう幹事長は、誰でもいい、というわけには行かなかつたからである。十五日早朝から南平台の私邸で組閣人事のまとめに入った三木首相らも、改造の要を党三役の人選に置いた。新聞辞令

は「幹事長に松野氏起用か」と三木の胸中を射た記事を流しあじめ、午前十時頃には、首相から福田、大平に連絡があり、幹事長松野頼三（福田派）、総務会長桜内義雄（中曾根派）、政調会長内田常雄（大平派）の構想に協力してほしいと言つてきた。この電話に出た福田は、「できるだけのことは努力しよう」と答えたが、大平は「松野幹事長にはなかなか反対が強い。派内で相談してみよう」と言つて電話を切つた。

松野は、吉田系から、緒方、石井派を経て、佐藤派の幹部となり、三木内閣の誕生と同時に福田派から政調会長に選ばれたが、やがて三木に接近して、福田派の不満を呼んでいた人物である。したがつて、福田から松野幹事長案を知らされた福田派内部には、強い反発が生じた。福田派の会長代行で挙党協四人男の一人であつた園田直が、熊本政界を二分するライバルとして松野の起用に難色を示したこと、これに拍車をかけたと言える。もちろん、大平派も松野には反対であった。同じく総務会でも、過半数を占める挙党協側の総務たちが松野幹事長案に反発していた。

混乱を收拾するために、午後一時から、自民党本部の総裁室で、三木、福田、大平、中曾根、灘尾、松野、石田の七者が会談が開かれ、結局、松野に幹事長を辞退してやらなければとて妥協が成立した。三木は、ポストについては譲歩するが、三人の顔ぶれだけは譲れないと主張し、内田幹事長、松野総務会長、桜内政調会長の案がまとまつたのは午後三時過ぎのことである。

幹事長に内定した内田は、大蔵省で大平の六年先輩。政界への出馬は大平と同じ昭和二十七年であり、政策通として知られてはいたが、政治的な手練手管を得意とするタイプではなかつた。自らもそのことを知悉していた内田は、幹事長就任の知らせを聞いて驚くとともに憤慨し、大平が記者懇談をしてくる最中の宏池会に血相をかえて飛びこんできた。大平の姿を認めるなり、内田は一きなり食つてかかつた。

「私は幹事長なんかやりませんよ。政調会長なら少しはお役に立てると自分でも思つていたのだが、いま聞いてみれば幹事長だつて言つじゃないですか。そんな、中華料理じゃあるまいし、テーブルをぐるりと回すなんて……。妥協もいゝけど、人を見て決めてくれ。ぼくは幹事長なんていつ柄じやない。」

事務局員が、「先生、いま記者懇談中なので暫く待つで」「ただけませんか」と注意をひながしたが、内田は黙つて「ない。懇談中だらうが会見中だらうが、私は少しも苦しくあつませんよ。記者の皆さんがいるならなお結構、皆さんにも聞いてもらいましょう。」

大平、鈴木、富沢といった宏池会の幹部は激昂する内田を縦がかりで奥の部屋に連れ込み、暑い日に汗をながして説得にこれ努めたが、内田は頑として聞き入れようとしなかつた。

記者団から情報が入つたのだろう、三木側近の海部俊樹官房副長官も、内田説得のために官邸から飛んできた。三木首相としてみれば、今日中に改造人事を済ませ、官中の予定もお願いしてある。内田幹事長の線がこわれたら、苦心に苦心を重ねて妥協したものが故の木阿弥となり、その結果、どんな事態が招来されるかわからない。みんなの説得によつて内田が折れ、「とにかく官邸に行くだけは行く」と言つて宏池会を出たのは午後五時を過ぎていた。

その夜、改造は終わつた。内閣では、拳党協に入らなかつた閣僚は全員留任した。拳党協に同調して国会召集の閣議に署名を拒否した閣僚は、福田、大平両相を除いて、全員交代した。入閣した閣僚のメンバーは三木色が強く、とりわけ福田派には入閣者についての事前の相談もなかつたといつ。

改造の済んだ翌十六日の夜、拳党協十五閣僚の慰労会があつた。去つていく十三閣僚をねざりつとこつ名前だったが、まだ戦いの余燐はさめぬ緊張感気が漂つてあり、金丸前国土庁長官は、「われわれの目的はまだ達してこない。あとは、福田、大平のお二人でよく話し合つてまとめてください」と述べた。要するに、今後の政権の受け皿をどうするかとこつことである。

拳党協騒動の間、ポスト三木の政権担当者を誰にするかといつ『受け皿』問題は、政局を左右する決め手として見えて隠れしていたが、総選挙、そして政変が聞近いとなると、もう避けは通れないことになっていた。

話しいか公選か、これは後継者決定に当つてこつもつともとの問題であるが、党を二分しかねない騒動のあとで、また

公選で争つ」とはあまりにも困難と思われた。『公選なら大平、話合いでなら福田』といつて党内の常識を前提として、福田周辺は話合いで意欲を示し、あらゆる人脈を動員した。新日鉄の永野重雄会長、帝王学の師として知られた安岡正篤らが福田政権実現の線で保利茂らと話を進め、工作は多様に展開された。永野邸の大福会談、上原正吉邸の大福会談、角福会談、大平・河野（謙二）会談など目まぐるしい裏の動きがあった。大平の腹心、田中六助もこの線で動き、十月上旬、三日間にわたって大平との問題を討議した。

大平の心境は単純ではなかつた。話合いで拒否し、党則によつて公選といつことになれば、政権はまず間違いなく自分にまわつてくるであろう。政権を担当するのは政治家の理想でもある。政策も長い間かかつて準備してきた。意欲も体力も決して誰にも負けるとは思わない。いま、政権を前にして、これを他に譲るところが政治家として取るべき道であるのか。それが政治家の責任を果たすことであるのか。だが一方、じつには長い抗争に明け暮れ、疲労しきつた党がある。もし公選によつて新たな争いが起ければ、党は果たしてその存在を金づくることができるだらうか。

田中六助は、三日間の説得のあと、十月六日、大平から一つの感触を得た。

「私はすぐに福田さんに連絡をとつた。福田さんは赤坂の料亭の部屋で待つてゐるところでの私は行つた。大平は承知したよ」と言つた。福田さんは喜んで、『一年でもいい、一年半でもいい』と言つた。私は、『後は大平に頼む』と念を押し、福田さんも同意した。それを私がまた大蔵省の大平のもとに報告に行つた覚えがある』と田中六助は語つてゐる。このことは福田から保利に伝えられ、十月十日、保利と大平は神奈川県茅ヶ崎のスリーハンドレッド・クラブにゴルフに出かけた。のちに、保利がその衆議院議長時代の秘書岸本弘一に語つたところによれば、その時の模様は次のようだつたといひ。

「ぼくは政権にはこだわるものではありませんよ」と大平が言つた。

保利が「あとのことを決めておかな」と党の足並みが乱れる。といふが、君と福田君がいる。せじだむつするか心を痛めていたのだが、君の決断で救われたよ。あとはぼくが責任をもつておちつとする」と答えると、大平は、「証文なんかも

「いや、むづいもならなこと」とはわかつて、結構ですよ」と言つた。

「いや、ぼくが中に入るのだから、そういうわけには行かない」。それが保利の心境だった。大平は、のちに周辺のものに、「保利さんはぼくの意志を確認するために会つたのだと思つ」と述べている。

「保利さんは三木の『受け皿』について福田、大平間に合意ができると、保利は、椎名副総裁の説得にかかりた。」この余白の模様を、後に保利衆議院議長の秘書をつとめた岸本弘一ら関係者の話から総合すると、それはおよそ次のとおりである。

「椎名さんは福田さんにすくなく反対した。『あんな者にできるかね。いつたじどのくじこやらせるのだ。一力用かね、三力用かね。三力用もやれるのかね』。これに対して保利さんは、『まさか、一、三力用どこのわけにもいかんでしょう。やつぱつ一年くらこはやらせなこと』」と書いた。」

だが、椎名の不満は、後継者よりも、挙党協の三木首相に対する態度にあつた。当時の内情について椎名の政治秘書だった池浦泰宏は、次のように語つてゐる。

「椎名さんは、どんな形にして三木さんを党の力でやめさせたと、う形をとりたかった。だから、三木解任決議を最後まで主張した。もうこれ以上はしようがないと、いつ段階でも、椎名さんは三木さんをやめさせると粘つていた。最後は三原さんたちまでが椎名さんをなだめに入つた。……椎名さんは三木さんが死んだ土俵しか見ていない。そこで誰が相撲をとるのかは別問題だった。保利さんは、『そんなことをしたら党が分裂する』と言つただが、椎名さんは、『三木をやめさせれば、誰かがならなければならない、それは電光石火決まる』とこう考え方だった。」

椎名は三木を裁定した責任をあまりにも強く感じていたのだろう。

受け皿論議の最後の詰めは、十月二十日と二十七日の二回にわたり、品川のホテル・バシフィック東京で行われた。福田サイドは福田、園田。大平サイドは大平、鈴木。この四人と立会人の保利が加わって、計五人の会談となつた。

第一回会談は大平の意向とそれをめぐる政局運営の基本の確認が第一の目的だったが、同時に、さし迫る総選挙をどう

戦つか、年を経て腐蝕のきた党をどう立て直すか、今後の政治運営をどう分担するか、政局転換の段取りをどうするかなど、党が当面する危機の打開について討議が行われた。

第一回目は、一回目の会談の整理と確認が行われた。出席者の一人、園田はこう記している。

「三木内閣は間違いなしに総辞職するだろうが、そのあとは自然の流れからすると大平内閣が成立する。それはそれで良いことだが、しかし私のかつてできた福田赳夫さんがそれでは、ひとつすると永久に政権を取れなくなると云うので、大平さんに頼みこんだのがホテル・パシフィックでの五者会談であった。……この席ではむずかしいことは大平さん、ひとこともいわなかつた。そればかりか、福田さんが総理を一年つとめて“それから先のことをどうするか”という話になつた時、大平さんが初めて口を開いた。『一年後のこととを今じて話しあつても仕方ないんじゃないでしょうか。一年後の』ことは一年後にあらためて話しあつことにしてよろじやありますとか』。

ト司なり“一年後に政権を大平に渡す、と文書にして、と迫るといひである。しかし大平さんはその逆を行つた。私は胸に迫るものがあった。」（『回想録』追想編）

大平は、じくに挙党協議が大詰めで一転妥結した後、三木首相退陣の保証について記者団から質問されたとき、「このような政治的な問題では、物理的保証や証文がとれるものではない」という意味のことを答えたが、岸元首相の大野伴睦にあてた証文の例をひくまでもなく、この種の約束は、たとえ証文があつても、その実行を迫れるものではない。もし明らかにしたところで、政権を私議したという譏りを受けるのが闇の山であらう。証文が何百枚あらうとも、人間としての信義がなければ、一切は無効となるのである。

園田がこのときの大平の発言について、「保利さん、大平さんに負けました。これじゃ一年後、私たちは大平政権樹立のために走り回るところと約束させられたよつたのですね」と会談の帰り道に話しあつたのも、「人間の信義」を保証とした大平の態度に打たれたからである。

NHK記者から園田の政治秘書に転じた渡辺亮次郎は、著書『園田直の全人像』で、この会談で確認された文書は次の

ようなものであったと書いている。

「一、ポスト三木の新総裁及び首班指名候補者には大平正芳氏は福田赳氏を推挙する。

一、総理総裁は不離一体のものとするが、福田赳氏は、党務を主として大平正芳氏に委ねるものとする。

一、昭和五十一年一月の定期党大会において党則を改め総裁の任期三年とあるを一年に改めるものとする。

右について、福田、大平の両氏は相互信頼のもとに合意した。

昭和五十一年十一月

福田 耄夫（花押）

大平 正芳（花押）

園田 直（印鑑）

鈴木 善幸（花押）

立会人の保利は署名もしなければ手も触れず、のちに大平に「くれぐれもあの文書は表に出さないよ」と注意した。むろん、大平もこの文書の存在を遂に自ら語つたことはなかった。

十月十五日、遅ればせながら、臨時国会の終幕に大平蔵相らが最も熱意をこめていた財特法が成立した。これによって政局は、任期満了選挙一本に絞られた。この選挙の実質的な運営に当つた奥野誠亮は、次のように述懐している。

「選挙といつものは総力戦です。作戦を立てて全体を動かしていく。政策、スローガンもはつきりさせなければならぬ。どういう候補でいかについても計画的に体制を考えていかなければならぬ。そういう意味では選挙をやれる条件には全くありませんでした。」

党的な状況に加えて、派閥も疲労の極にあり、候補者一人一人は、マスク、世論、野党の非難の声の中、自分の力だけを頼りに全力をあげて生き残る以外になかった。

そして選挙結果は、予想より遙かにきびしいものとなつた。当初は公認候補で一百六十名ぐらいまで落ち込むであつた見られていたが、これを大きく割り込んで、当選者は一百四十九名。自民党は結党以来はじめて過半数を下回つたのである。無所属当選者の入党、追加公認を加えて最終的には一百六十一名になつたが、過半数の一百五十五名を上回る」とわずか六名であつた。国民は自民党に冷感な審判を下した。考えてみれば、これまでの政争は結党以来つねに安定過半数を確保し、政権が自らの手中にあるという状況のもとでの争いであつた。だが、いまやその政権を支える基盤自体が音を立てて崩れている。三木も反三木もともに敗者であり、全党は息をひそめて三木首相の出方を見守つた。

一方、社会党と共産党も振わなかつた。爆発的人気を集めたのは自民党から離党した河野洋平たちの新自由クラブであり、また公明党、民社党も進出した。すなわち、自社二大政党がともに沈んで、中道政党が盛りあがつた。先に伯仲状態に入つていた参議院同様、衆議院も与野党の議席数が接近し、政治は、自民党安定多数の時代から保革伯仲時代という新しい局面を迎えたのである。

以上した状況の中で、三木体制の中でただ一人、反三木陣営を代表して党の運営にあたつた内田幹事長は、全く未知の選挙戦を指揮し、苦しい党の台所を切り盛りするという困難な仕事を一手に受けた。しかも、選挙後には政変が待つており、それを何とか円満に処理しなければならない。内田は文字どおり寝食を忘れてこの政変劇の舞台回しの役をつとめた。

十一月十七日、三木首相はついに退陣声明を発表した。その翌日、大平は内田の功績をたたえてこう言った。

「もしおれがあの時、幹事長をやつしてたら、ぬきやしならぬ」とになつてただろ。挙党協はさあやまな注文をつけてしまつて迫つてきただのう。三木も拒絶反応を見せただのう。党の運営は二ツもサッともいかなくなるといふのだった。だが、内田幹事長だからまくこけた。また党の分裂も避けえた。内田さんは『おしゃべり幹事長』なんて悪口を言われながら、どつち寄りでもないようなことを言つて、とにかく党を分裂させず、これまでもつてきてくれた。彼の果たしてくれた役割は機械でいえばベアリングのようなもので、その功績は実に大きい。この口か内田さんに報いねば……。」

「内田幹事長」は苦しまぎれの起用ではあつたが、内田は、人間が難局に直面したとき、自分も知らなかつたよつた真価を發揮することがある立派な例を示したのである。

幹事長として党の分裂回避に全力を尽くした内田は、幹事長退任後、間もなく病を得て他界した。大平は故人の人柄を「為して待ます、功成りて居らず」という在り方を自然に示された。……その進退は一幅の絵であり、見事な芸術であったと最大級の讃辞をもつてその弔辞を飾つた。

三木退陣の後をつけて、後継總裁と首班指名候補を選任するため、十一月二十三日、党大会に代わる両院議員総会が開かれた。この前日、立候補が締め切られたが、届出を出したのは福田一人であつたため、福田は満場一致で選出された。大平は不出馬の弁を次のように語つた。

「石油危機後の経済的諸困難の克服も、伯仲状態を迎えた政治情勢も、きわめて厳しい。その上、いまの自由民主党といふ士俵は、私と福田さんが四つに組んで相撲をとれるほどの瓜ではない。いまはまず党と「う士俵をしつかりさせる」とだ。その上で、堂々と公選でも何でもやればよいではないか。何よりもまず、わが党は政権政党として伯仲国会を運営すると、いう国民の負託に応えるといふがなければならない。」

大平はそう述べたあと、一転して大福提携にふれ、「私と福田さんは、生まれも違えば、生い立ちも異なり、これまで親しい間柄というより、対立する関係にあつた。それぞれの政策は、外交、防衛、経済など党の異なる主張を代表してきた。こんど、この累たる二つが協力し合おうといつたが、その極端に相異なるものが提携し、協力し合つてこうが面白いのだ……」と獨得の哲学を展開した。

大平は後に、元『毎日新聞』論説委員の評論家田中洋之助との対談を単行本の形で出版した（昭和五十三年九月三日刊）が、この本の題名を相談された大平は、『複合力の時代』といつて名前を選んだ。この時の説明で大平は、「われらは、産業も技術もみな異質のものの組合せによって新しい活力、新しい局面を開いていく時代だと思つ。異質のものの複合は、

単にそれぞれの和ではなく、より大きな新しいものを生み出していく。その力によって未来を切り開いていく時代だ……」と述べているが、大福提携の政治的意味もそこに見出していくのであれば。

同時に、また、それは若い頃からの橋田論的発想の展開でもあった。自由民主党という間口の広い人間集団 政党を橋田とすれば、一つの焦点は福田もしくは福田派であり、もう一つは大平もしくは大平派である。Jの一つの力の緊張関係で党を一つにまとめ、新しい活力を發揮して難局に対処していく。Jの橋田は一つの焦点に信頼関係が保たれれば大きな威力を發揮するだろうが、相反発するならば、相剋と混迷を招くに至るであろう。しかし、いまは、生まれも育ちも異なる一本の巨木が合掌を作り、力を併せて老朽化した党の屋台骨を支えて行かねばならない。これがこの時の大平の考え方であった。

福田赳氏就任の翌二十四日のクリスマスイブに臨時国会が召集され、首班指名が行われた。出席議員数は五百八名。福田は過半数を上回ることわずか一票の二百五十五票を獲得して首班に指名され、その夜の人事で大平の幹事長が決定して、大福提携と称される新しい時代が始まった。

それにして、大平は、Jの約一年間の党内抗争をどのように見ていたのであらうか。彼は、翌年一月の党大会における幹事長としての『党情報報告』の中で、やや公式論的にではあるが、次のように述べてある。

「……かえりみる」、昨年一月早々、米国上院においてロッキー事件が突如として公にされ、爾来この事件をめぐる世論の高まりの中で、わが党が振幅のはげしい動揺を続けた年であります。

政治不介入の原則のもとで、この事件の真相の徹底解明を進めるにについては、わが党には誰一人異論をさしはさむ向きもなかつたし、事実、政府は米国政府の協力をもとりつけ、鋭意その解明を急いだのであります。わが党にとってこの問題はロッキー事件の処理自体にあつたのではなく、この事件をめぐる政局の処理にあつたのであります。すなわち、その真相を究明しつつ、早期に国会を解散すべきであるとする側と、そうではなく、まず総辞職して国民の前に本件に伴う政治責任を明らかにするのが先決で、解散は急ぐべきではないとする側とが鋭く対立したのであります。もとより、そ

のいすれもが党の将来を思つものでありますたが、このことが臨時国会の対策をはじめ党の重大な意思決定に深刻な影響を及ぼし、ついに党内紛争の様相を帯びるに至りました。

苦惱に満ちた一年の回顧から始まり、任期満了選挙の敗北、福田内閣の発足と多事多難な前途、国民の自民党に対する根強い不信感を述べたあと、大平は次のよつてつけた。

「長きにわたる政権担当の間に見られた党紀の弛緩と時代に対する対応力の不足は、心ある国民の期待に添いえていないつらみがあります。新しい政権は、何を描いても、かかる不信を解消し、わが党の立直りを求める国民の期待に応えるため全力をあげなければなりません。」

なお大平は、この総選挙の直後に兄数光を失つた。数光は町民の信望厚く、当時、豊浜町の町長を三期つとめ、すでに後進に道をゆずつていたが、弟正芳のこの十回目の選挙の成績が総裁への道の重要なステップだと考へ、十万票の獲得を目標に異常な熱の入れようであった。

選挙が公示されて間もなく疲労がひどくなり、周囲のものが数光の嫌がるのを押し切つて入院させた。十一月三日夕刻全国遊説を終えて愛媛県境から選挙区入りした大平は、そのまま病院に向ひ、兄を見舞つた。数光は、弟の姿を見るなり、「なんばどれるんぞ」と、大平派議員の当選見込みをたずねた。総選挙が終われば、総裁公選があるという睨みである。大平は、「前より増えるぞ」と答えた。地元遊説の日程はきびしく、正芳はあと一度兄に顔を合わせただけで、あわただしく帰京した。

開票の結果は、大平は九万八千四百十一票、得票率四一・三%の第一位、堂々たる成績であった。数光は手をたたいて喜び、「病気はもうなおりた。早く家に帰してくれ」と言つていたが、七日夕方、突然の発作で死亡した。死因は心筋梗塞である。